２　海外都市行政視察　総括

団　長　田坂　信一

平成２４年７月２７日、平成２４年度松山市議会議員海外都市行政視察団を結成し、同日開催された第 1 回打ち合わせ会において、団長、副団長の選任を行い、随行職員を決定した。

また、平成２２年度の各会派代表者会議の申し合わせ事項に基づき、経費の縮減、成果報告の充実について協議の上、視察先、視察内容等について慎重に審議を行い、その結果、視察旅費については、昨年度と同様、予算額から事前に一定額を減額することとした。

また、調査研究テーマについては「自治制度について」「財政制度について」「地方分権について」「震災復興について」「社会福祉について」を選定した。

その後、８月７日には旅行業者７社を対象に説明会を開催し、あらかじめ提示していた視察先や旅程等に関する条件を基に、各社から企画書を提出してもらい、８月２９日に開催した第２回目の打ち合わせ会で、各社の企画書を審査した結果、名鉄観光サービス（株）の企画案を採用することとなった。

９月６日の第３回打ち合わせ会では、企画を採用した名鉄観光サービス（株）から、日程等についての詳細な説明を受けるとともに、テーマごとの担当者を決定した。

そして、９月２８日の９月定例会最終日の本会議において、８名の議員の派遣承認を受けたものである。

１０月５日の第１回勉強会においては、池本俊英副団長の辞退により副団長が欠員になっていたことから、新しく副団長に猪野由紀久議員を選任した。その後、団員変更によるテーマ及びテーマごとの担当者について再協議し、新たな分担を決定した。

１０月１９日の第２回勉強会で、より具体的なテーマや視察先の概要、あるいは渡航に関する基本的な情報等について、名鉄観光サービス（株）から説明を受け、それぞれのテーマについて、より深く審議した。

（勉強会の様子）

１０月２５日に開催した第３回勉強会では、５つの調査研究テーマのうち４つのテーマについて、それぞれのテーマに関連した松山市の現状について各担当課から説明を受け、ニュージーランドの現状を把握する際の参考とするとともに、今後の市政に反映するための視点についての理解を深めた。

１０月３０日の第４回勉強会では、残りのテーマについて担当課から説明を受け、さらに最終打ち合わせを行い、渡航に備えることとした。

そして、出発日である１１月４日には、伊丹空港へ移動するための搭乗手続きを全員が終えたのち、午後２時３０分からは寺井議長、平岡理財部長をはじめ議会事務局職員や財政課職員の皆さんの出席の下、出発式を挙行した。

式では、寺井議長から「視察目的を達成し、それらの成果を市政に是非反映していただきたい。」との激励を受け、松山空港から伊丹空港を経て関西国際空港へ移動後、午後８時５０分に乗継経由地であるオーストラリアのゴールドコーストへ向け空路、出発した。

１１月５日早朝ゴールドコーストに到着後、さらに航空機を乗り継ぎ、ニュージーランドのクライストチャーチに午後２時５０分（日本時間午前１０時５０分）に到着した。関西国際空港を出発してから、１４時間が経過していた。

なお、ニュージーランドと日本の時差は通常３時間であるが、ニュージーランドはサマータイム制を導入していることから、その期間中は時差が４時間となり、ニュージーランド時間が日本時間よりも４時間進んでいることになる。

南半球にあるニュージーランドは北半球の日本とは季節が正反対であることから、季節は春から初夏を迎えるところと聞いていたが、到着した時のクライストチャーチの気温は１０℃前後であり、飛行機を降りた途端、予想外の寒さに直面し一同震えあがった。

現地ガイドの尾関さんによると、現地の方にとっても予想外の寒さであり、私たちと同様、驚いているとの事であった。

さてここで、私たち視察団が訪問したニュージーランドの概要や特徴について、様々な面から触れておきたい。

まず、ニュージーランドの人口は約４４０万人で日本の人口の約２９分の１、面積は約２７万１，０００ｋ㎡で日本の面積の約４分の３である。

人口密度は日本が約３４３人／ｋ㎡、ニュージーランドは約１６人／ｋ㎡であり、全国レベルで比較すると、日本の約２１分の１となるが、ニュージーランドの中でもオークランドやクライストチャーチのような人口の集中している都市の人口密度は、２５０～２６０人／ｋ㎡であり、これは愛媛県の人口密度とほぼ同程度である。

（ニュージーランド最大の都市・オークランド）

首都は、かつてオークランドであったが、１８６５年にウェリントンに定められた。

地理的には、北西に２，０００㎞離れてオーストラリア大陸と対し、南方の南極大陸とは２，６００㎞離れている。また、北島と南島の２つの主要な島と多くの小さな島々で構成され、北島と南島の間には、英国の探検家であり、ヨーロッパ人で初めてニュージーランドに上陸したジェームズ・クックの名にちなんで名付けられたクック海峡がある。

北島には、首都であるウェリントンや同国最大の都市であるオークランドがあり、政治機能や経済・商業機能が集中している。

一方、南島は、最も面積の大きな島で、中心都市はクライストチャーチである。島の中央には、南島を形作る「背骨」にあたる山脈で、ヨーロッパのアルプス山脈にその姿が似ていることから「南半球のアルプス山脈」と呼ばれる南アルプス山脈がそびえている。

最高峰は、先述の海峡名の由来ともなっているジェームズ・クックにちなみ名づけられたクック山で、標高は３，７５４ｍである。

民族に関しては欧州系（約６８％）、先住民マオリ系（約１５％）、アジア系（約９％）、ポリネシア系（約７％）となっており、特に近年、韓国人や中国人などアジア系の増加が著しいと言われている。

（放牧されている羊）

国の経済は、一次産品輸出に依存する経済であり、貿易依存度が高いといえる。一次産品は輸出の６～７割を占めており、酪農製品、肉類、水産物が主力となっているが、最近ではバイオテクノロジーを含む科学技術分野や映画制作にも力を入れている。

政治体制に関しては、中央政府と地方政府の二層構造となっている。地方政府には「広域自治体」と「地域自治体」の二種類があるが、両者の担当事務は明確に区分され、並立の関係に立っているといわれている。

憲法上、英国女王エリザベス二世を元首とする立憲君主国であるが、実際はニュージーランド政府の助言に基づき国王により任命されたニュージーランド総督が国王の職務を代行している。また議員内閣制を採用し、慣習法に則り内閣が行政権を行使している。ただし、英国と異なり、議会は一院制で任期は３

年とされており、さらに選挙制度は小選挙区比例代表併用制と呼ばれ、基本的には比例代表制に分類される選挙制度であり、これは日本の衆議院の小選挙区比例代表並立制とも異なる。

日本との関係であるが、両国の外交関係は、１９５２年４月２８日のサンフランシスコ講和条約発効をもって始まっている。そのことから、今年２０１２年は日本とニュージーランドが外交関係を樹立して６０周年の節目にあたる記念すべき年であり、両国で様々な記念イベントが開催されている。今回私たち視察団が同席することのできた第３９回日本ニュージーランド経済人会議開催もその一環として位置付けられており、そこで私たち視察団は貴重な体験をすることになるが、その件については後述する。

教育制度については、ニュージーランドでは６歳から１６歳までが義務教育期間であり、１６歳を過ぎると以降の就学課程は任意である。

なお、慣例的に５歳の誕生日を過ぎれば小学校への入学が許可され、初等教育を開始することも可能であるため、日本のように４月に対象児童全員が一斉に入学するということはないという。ちなみに、移動中のバスの車窓から見えた小学校の校庭には青々とした芝生が敷き詰められ、児童たちが楽しそうに駆け回っている様子が印象的であった。

また、ニュージーランドには、保育研究者や保育に実践的に関わる保育士などの共通理念を基に作られた「テ・ファリキ」と呼ばれる就学前教育カリキュラムがあり、公平で質の高い幼児教育を提供するための基礎となっている。「テ・ファリキ」とは、マオリ語で「編まれた織物」という意味があり、就学前の幼児教育の骨組みとなるような共通理念のもとに、多様なプログラムが組まれている。就学前教育については、少子化が進行し、育児サービスが多様化することに伴い生じている幼稚園と保育所の抱える問題点を解決するために、幼稚園と保育所の一元化を図ろうとする政策に向けての論議が、現在わが国でも活発になされているところである。

今回の視察に当たり、教育に関しては視察テーマとして選定していないこと

から視察研究する機会を設けなかったが、ニュージーランドの就学前教育機関の多様性の中にヒントを求めながら、日本のあるべき幼児期教育について、検討していくことも有益であると思われた。

スポーツに関しては、ニュージーランドはラグビー、ヨット、登山など、いずれも世界トップ水準にあり、これらの分野では日本はニュージーランドに遠く及ばない。ラグビーでは、いまやスポーツイベントとして、ＦＩＦＡワールドカップ、オリンピックに次ぐ世界で第３番目に大きな大会であるともいわれるラグビーワールドカップにおいて、ニュージーランドは第６回大会を除き毎回４位以上の成績を収め、さらに第１回及び最新の第７回大会で優勝している。これは、緑あふれる街・クライストチャーチを代表するハグレー公園の中にもラグビー場が設置されているなど、至る所に芝生の広場がスポーツ施設として整備され、生活の一部として幼少の頃からスポーツに接しているからこその成果であろうと感じた。

（オークランド・ドメイン内に整備された
芝生グラウンド）

さらに、世界最高峰エベレスト（チョモランマ）に、ネパール人シェルパとともに世界で最初に登頂に成功したエドモンド・ヒラリー卿は、ニュージーランド・オークランド出身の登山家であり、ニュージーランドはその後の世界の登山界を先導してきた国の一つとしても知られている。なお、ヒラリー卿は５ニュージーランド・ドル紙幣の肖像ともなっている。

最後に、ニュージーランドの先駆的諸政策について触れたいと思う。

ニュージーランドにおける諸制度については、近年日本においてもようやく

その詳細が知られるようになってきたといわれているが、政治的自由と平等、性差による不平等の廃止、社会福祉制度の拡充による弱者保護等の諸問題に関して、世界でも屈指の先進国であるといえる。その先進的な事例を列挙すると、

１８５６年　普通選挙制度の導入
１８７７年　義務教育の無償化
１８９８年　老齢年金法制定
１９０６年　寡婦年金法制定
１９２６年　家族（児童）手当制度導入
１９３８年　社会保障法制定

などが挙げられる。多くの先進国にとってそれぞれ大きな政治課題であるこれらの課題に対して、ニュージーランドでは、すでにその大半を１９世紀半ばから２０世紀初頭の間に実現している。

もちろん、これらの施策の中には、既に過去のものとなったものもあるが、その基本理念は、あくまでも国民本位・市民本位であり、生活と人権に関する政策の実施に関しては、日本のみならず、世界の国々が範とすることができるものであろう。

以上、様々な側面からニュージーランドの特徴を述べてきたわけであるが、今回の視察で設定したテーマを中心としながら、その他の分野においても本市の市政へ反映することがふさわしいと思われる面は、あまねく吸収するという姿勢で視察にあたることが視察団全員の総意であった。

さて、震災の影響で外国からの訪問客を収容できるホテルが実質３つしか開業しておらず、私たち視察団は、空港からほど近くの、国際南極センターの隣にあるホテルにチェックインし、明日からの視察に備えることとした。

なお、クライストチャーチは、南極での食料や燃料の補給基地になっていて、ホテル内では南極に向かう越冬隊員の姿を多く見かけた。

尾関さんからは、南極のスコット基地での勤務を希望する求人も時々出ていると聞いた。

（南極に向かうために待機中の航空機）

１１月６日、最初の視察先のクライストチャーチ市役所では、カンタベリー地震のお見舞を申し上げた後、視察のテーマである自治制度や地方分権について、ミリンダ・ペリス氏から詳細にご説明をいただき、各団員とも熱心に意見交換を行った。

午後からクライストチャーチ・カンタベリー観光局を視察し、観光局の最高責任者のティム・ハンター氏から震災復興についてご説明をいただいた。

１１月７日、震災で立ち入り禁止区域になっている地域を視察した。

クライストチャーチ市では、東日本大震災の数週間前に発生したカンタベリー地震で、１８５人（うち日本人２８人）が犠牲となった。

クライストチャーチ市は、南島の中で人口が約３７万人の南島最大の都市で経済、文化の中心地であるが、震災の影響で中心地の一部は現在も立ち入り禁止区域となっている。

（フェンスにより封鎖されている市中心部）

エイボン川という美しい川が街の中心を流れているが、震災の時には、川沿いの地区は液状化現象に見舞われ、被害を受けた市民は郊外に移転を余儀なくされたが、その結果比較的震災の影響が少なかった郊外に住宅や企業が進出し、新しい街が形成されつつあった。

また、景観や街並みを維持する目的の条例などは特にないとのことであったが、街の中には日本でよく見られる無秩序な広告用の看板など、屋外広告物は見当たらず、木々の緑や花々が歴史的な建造物や住宅と見事に調和していた。条例などに強制されるまでもなく、自分たちで景観や美観を守ろうという市民意識の強さを感じた。

午後２時２０分、次の視察地であるオークランドに向けて出発し、午後４時過ぎにオークランド空港に到着した。

オークランドはクライストチャーチより北に位置するため、より暖かく（北半球と逆で、北に行くほど暖かくなる）、団員一同ほっとしたところであった。

オークランド市は北島にあり、１４０万人を超える人口を擁するニュージーランド最大の都市である。高層ビル群と無数のヨットが浮かぶ青い海、緑の豊かな公園や丘陵があり、年間を通じてアウトドアのレジャーが楽しめる魅力的な街である。

１１月８日、最初の視察場所に行くまでの時間を利用し、マイケル・ジョセフ・サヴェージ記念公園に向かった。

マイケル・ジョセフ・サヴェージは、１９３５年に政権を獲得した労働党の党首であり、労働党初の首相である。

（マイケル・ジョセフ・サヴェージの記念碑の前で）

彼は、住宅に困窮していた人々のための対策として、国家的プロジェクトとして「ステートハウス」と呼ばれる住宅建設を進めるなど、人々の生活改善のための施策を展開し、１９３８年には先述の社会保障法を成立させたことで有名であるが、首相在職中に病に倒れた。福祉国家建設のために力を尽くし、ニュージーランドで最も尊敬される首相の一人と言われるサヴェージの遺体は、彼の功績を讃える記念碑とともに、ワイテマタ湾を望む高台に埋葬され、その一帯が記念公園として整備されている。

その後、ニュージーランドを代表する投資金融銀行であるバンコープ社のオフィスを訪問し、オークランド市職員のタラ・プラダン氏から自治制度や財政再建について詳細なご説明をいただき、意見交換を行った。

オークランド市職員の説明の後、バンコープ社の最高責任者クレイグ・ブラウニー氏、ゼネラルマネージャーのミア・エバンス氏をはじめ、スタッフの方からニュージーランドの経済や税制面・行政改革の取り組み等について、詳細に説明をいただき、意見交換を行った。

（クレイグ・ブラウニー氏（左））

その後、日本ニュージーランド経済委員会主催で、両国友好６０周年記念事業の一環とも位置付けられ、市内のホテルで開催されている第３９回日本ニュージーランド経済人会議に出席させていただいた。

先に述べたように、本年はニュージーランドと日本が外交を樹立してから６０年という記念すべき年であり、ジョン・キー首相が、首都のウェリントン

からこの会議のために特別に出席されると聞いていた。

この委員会は、両国の経済関係を緊密化し、長期的に発展させることを目的に１９７４年に設立された会で、日本の主要企業のトップもメンバーに連ねている。

（視察団を代表してスピーチを行う）

出発前に、この会議に出席できることはお聞きしていたが、バンコープ社のクレイグ・ブラウニー氏のご配慮で、視察団を代表してスピーチをさせていただく機会までいただいた。

スピーチが終わると、日本側の議長である住友林業の矢野代表取締役会長（宇和島市出身）から、「この会議を、来年は松山市で開催しますのでよろしく」という有り難いお言葉も頂戴した。

ジョン・キー首相の講演の中で、「ニュージーランドと日本の間では４５の市と姉妹都市協定が結び、大変良好な関係にある。友好国であり、世界三位の経済大国日本が、今のままでは世界から取り残されてしまうのではないかと大変危惧している。世界は強い日本を求めており、ＴＰＰ、ＦＴＡなどにも参加していただいて、どんどんと力をつけていただくことを期待している」と大変力強い激励の言葉を頂く。

（ジョン・キー首相（右から二人目）を囲んで）

講演の後、両国の委員から首相に対して質疑応答があり、教育問題や経済問題など活発な論議が交わされた。

プレゼンテーションの

中で、日本と季節が反対であることや、豊かな自然、多民族国家などの利点を生かし、日本の多くのコマーシャルがこの地で制作されていることも初めて知った。

ティーパーティーでは、幸いなことに、我々視察団一同、ジョン・キー首相を囲んで親しく歓談させていただくという思わぬ光栄に預かった。また、来年、松山に来られ予定のニュージーランド側の議長のブライアン・マーティン氏をはじめ、ニュージーランドビジネス協会の事務局長のステファン・ジャコビ氏らと名刺交換をさせていただいた。

（ノースショア病院・ピルチャー氏を囲んで）

１１月９日には、オークランド市のワイテマタ地区保健委員会が管理・運営するノースショア総合病院を視察した。

認定看護師のキャロル・ピルチャー氏をはじめスタッフの方々から病院の概要や高齢者介護に関わる専門医や看護師の仕事内容などについて詳細にご説明をいただき、熱心に意見交換を行った。

１１月１０日には、オークランド市内を視察後、オークランド空港へ向かった。

午後３時５５分オークランド空港を出発、午後５時２５分にシドニー空港へ到着した。（時差－２時間）

シドニーでは、実業家として活躍されている旧北条市出身の定松勝義氏が経営する「鱒屋」で、氏を交え意見交換を行った。

定松社長から、オーストラリアで初めて米作りをした松山市出身で、元帝国議会議員の高須賀伊三郎（穣）氏の話や、定松氏自身が日本を観光立国にする

ために日頃活動されていることなど、貴重なお話を聞かせていただいた。

１１月１１日には、シドニー空港を午前８時４５分に出発、オーストラリアのケアンズに午前１０時４５分到着した。（時差－１時間）
ケアンズ空港を午後１２時２０分に出発、午後７時１０分、ようやく関西国際空港に到着した。（時差－１時間）
日程の関係でその日のうちに松山に帰ることができないため、泉佐野市で１泊した。

１１月１２日には、伊丹空港を午後１時１５分に出発し、午後２時１０分、松山空港到着後、到着ロビーの一角にて解団式を行い、その後解散した。

なお、今回の海外都市行政視察の各調査研究テーマの報告については、各団員が別途報告書を作成しているので、そちらに譲ることとする。

【おわりに】
出発前の長期予報で悪天候が懸念されたが、幸いなことに視察期間を通して好天に恵まれ、団員一同、元気に事故もなく全行程を終えることができた。
団員一同、海外行政視察の目的をしっかりと自覚し、事前の勉強会など重ね、綿密な準備の上、行革、分権の先進国であるニュージーランドで団員それぞれのテーマに沿って、熱心に視察を行うことができた。
昨年、両国ともにわずか数週間のうちに、大地震に見舞われるという事態がおきたが、速やかに両国の救助隊がそれぞれの被災地に向かい、被災者の救助のために尽力するという、友好国ならではの相互支援体制も行われたとお聞きした。
クライストチャーチをはじめ、被災地の一日も早い復興を心から願うものである。
また、ニュージーランドは、政権交代がある中で、一貫した理念を持って改革を進め「ニュー・パブリック・マネジメント」と呼ばれる公的部門改革にい

ち早く着手し、国レベルだけの改革ではなく、地方自治制度も並行して行うことにより、大きな成果を上げているといわれている。

また、医療・福祉面では、私たち市議会も様々な議論を重ねながら、福祉サービスの向上を目指して取り組んでいるが、ニュージーランドはかつて「南半球の福祉国家」とも呼ばれ、様々な福祉制度の改革を通じて、高齢者に提供するサービスの内容や今後の福祉サービスの在り方について大いに学ぶべき点があった。

これらの視察の成果を、今後の市政発展に是非とも反映させていきたいと思う。

また、日本ニュージーランド経済人会議の場において、ジョン・キー首相と親しく歓談できるという思わぬ幸運にも恵まれた。

先述のように、時あたかも、本年は、日本とニュージーランドが外交を樹立して６０年という節目の年であり、この記念すべき年に訪問できたことを大変うれしく思うと同時に、今後とも両国の交流が一層深まり、更なる発展を遂げるよう、心から祈念するものである。

（ジョン・キー首相と固く握手）

また、今回の視察が円滑に進み、かつ、限られた時間の中で活発な論議ができたのもそれぞれの視察先の皆様のおかげであり、派遣団を代表して敬意を表するとともに、深く感謝申し上げる次第である。今後の議会活動の中で、参加した各団員が、この視察で得た知識を十二分に活用し、市民福祉のさらなる向上に繋げていくことを確信しつつ、団長としての視察の総括とする。